

地域調査の視点 —— 筑波山巡検を通じて ——

伊藤純郎*

1. はじめに

新学習指導要領で示された内容は、高等学校社会科再編成や小学校低学年生活科開設など大きな問題を引き起こしたが、最近の状況を考えると、指導要領の是非に関する論争から、実施に対する具体的な方法論に比重が移ったように思える。とりわけ生活科における実践研究は活発であり、授業構成にも一定の方向性が生まれてきたようだ。⁽¹⁾

それに対して高校社会科再編成の問題は、当初さかんに論議された解体か再編成か、社会科の本質は何か、といった課題が中途半端のままに終わり、かねてから科目独立志向が強かった高校教育現場では、世界史必修化に伴う科目単位数の調整や現代社会の分割（政経・倫理）に話題が集中しているといっても過言ではあるまい。

こうした高校現場で日本史を教える筆者にとっては、高校社会科の再編成の問題は、社会科とは何かを確認する良い機会となった。社会科の本質を考える中で痛感したのは、筆者を含めて高校教師の多くは、社会科教育の観点にたった教育より、専門科目の研究・教育に重点を置いた教育に明け暮れていたという事実である。社会を構成する一人としての高校生に、民主的社会を形成するための理解、態度、能力を養成することが高校社会科教育の目標といえよう。その意味では知識偏重の教育から早急に抜け出すことが大切であろう。⁽²⁾

幸いなことに本校では開校以来、教室での学習以上に野外での学習を重視し、巡検や研修旅行といった教科外活動を通じて社会科の授業に厚みをもたせ、民主的社会を形成する能力を養成してきた。具体的には中学2年時の里美キャンプ、3年時の金沢・京都研修旅行、高校1年時の筑波山巡検、2年時の台湾研修旅行がそれに該当し、かなりの教育効果をあげてきた。⁽³⁾

こうした取り組みは、最近では本校のみならず多くの学校で実施されている。研修旅行、班別学習、体験学習など形態は様々だが、準備や報告集などを見聞する限りでは、本校の取り組みとは基本的な考えが異なる事が多い。

本稿では、高校1年時に行われる筑波山巡検を題材にして、「地域調査活動」に対する筆者自身の基本的な考えを述べてみたい。

2. 筑波山巡検の概要

本校高校1年生を対象に実施されている筑波山巡検は、開校以来の学年・教科行事として、今年で13回を数えるものである。3泊4日の日程で、筑波山青年の家に宿泊しつつ、ふもとの新治村山の荘地区にて行われるフィールドワークである。

前半2日は理科担当で、筑波山の生物や植物、地質調査が行われる。山の荘地区に隣接する採石場での地質調査や河川の生物・植物調査が行われる。

* 茨城・茗溪学園中学高等学校

後半2日が社会科担当になる。1日目は山の荘地区内の6つの区（永井・本郷・大志戸・小野・沢辺・東城寺）のお年寄りからの聞き書き調査を行う。既に配布された調査用紙（資料1参照）にもとづいて、お年寄り（話者）の生い立ち、村の産業や歴史の移り変わり、村の民俗などを調べるものである。2日目は地区の家配置や道路・河川・寺社などを地図に描いた上で、地区内の石造物と墓地を調べ、刻まれている文字を写すのである（資料2参照）。宿泊地である青年の家における夜の学習会では調査用紙の完成と話者への礼状を作成する。

こうした実際のフィールドワークの前に、いわゆる事前学習が用意される。生徒の班編成の中で人文・自然係が設定され、人文係が中心となって、山の荘地区の歴史や産業が調べられる。新治村で発行している書物の他に、図書館に保管されている過去の調査用紙などから生徒自身が地区の歴史や産業をまとめる。先輩の調査用紙やレポートを読むことによって生徒自身で問題意識が高まることが多いようだ。こうした作業の他に巡検に関する講演会を開く。筑波山やフィールドワークに関することについて外部から講師を招いて1時間半程度話をしていただく。話の内容は講師によってさまざまだが、授業とは異なる雰囲気での学習が出来、生徒には好評である。⁽⁴⁾

巡検後は調査用紙やレポートの整理・保管を行う。話者の聞き書き調査は話者ごとに、石造物調査は地区ごとにファイルし、図書館に保管する。次年度の生徒がいつでも閲覧出来るように、年度別・地区別にまとめておく。

ちなみに調査用紙やレポートは現代社会の評価対象となる。230人近くのレポートを読むことはしんどいが、生徒の新しい発見を知ることも多い。

こうして巡検の概要を記すと、この取り組みが小学校生活科の内容に類似していることに気づかされる。生活科導入が本格的に論じられた3～4年前、筑波山巡検は生活科そのものだ、という声が本校教員の間からあがったのもうなずけよう。⁽⁵⁾

このフィールドワークは、野外で教材（学習材）に触れさせるといった経験主義のみに、そのねらいがあるものではない。事前学習——テーマ設定——フィールドワーク——資料整理——レポート提出といったプロセスを学習させることによって、社会科学や人文科学の過程を学ばせることにある。

3. 歴史を考える視点 —— 勝手口の眼

地域調査を行ううえで最も大切な事は、どのような立場から物を見るか、という点にあると筆者は考える。

筑波山巡検では新治村役場や教育委員会といった行政窓口を通しての事前準備や調査は必要最小限にしている。もちろん事前のあいさつや報告書持参によるお礼などは行うが、聞き書き調査における話者の選出や調査区域の設定は、学校サイドや話者の責任者によって行っている。それは行政窓口を通して調査をやれば、その窓口の顔しか出てこないと考えるからである。

こうした考えの基本には、いわゆる「勝手口の眼」がある。この言葉は筆者自身が学生時代からたたきこまれた調査の基本である。ものを見る時の視点は、家の構造でいえば玄関といった表口ではなく、勝手口などの裏口にあるというものであり、日常生活を的確にとらえるには、日常的な生活空間がある勝手口に求めるべきだという考えである。⁽⁶⁾例えば家を表向きの大きな門

構えだけでとらえて家庭の内実を評価する方法ではなく、勝手口のにじみでている生活と気風から家のありかたを考えることである。

とはいえ、いきなりやって来たよそ者に、勝手口まで見せる者は少ないだろう。1～2回訪ずられただけで勝手口を覗こうとするのは無理な話だ。そこで事前準備として何回も訪問するのである。何回も訪れて、いわゆる信頼関係が生まれて、勝手口でお茶を飲んだり、お喋りが可能になって初めて事前準備が終了するのである。筑波山巡検でこうした関係が出来上がるまで5年はかかったと思う。⁽⁷⁾ だから生徒自身は年に1回しか来ないが、話者の多くは、その訪問を楽しみにして、中には家宝や古文書まで披露する話者もいる。

なぜ、こんなにまでして「勝手口の眼」にこだわるのか。それは、このような物の見方は生活の場の中に、日常性の場の中に何かあるかを見つけようとすることである。そしてこの問題は、物を俯瞰的に見るのか、仰角的に見るかにつながるといえよう。高いところからまさに高所的に村の風景を見るのではなく、生活者と同じ視点から、まさに地にはいつくばる虫の様に村を見ることが大切であり、調査の基本と考えるからである。

学校教育に限らず、最近の調査活動では、教育委員会や資料館といった行政サイドのみを窓口にして一方的な視点のみから物を見つめる事が多い。また家の玄関から入り込んで立派な座敷を眺めただけで、その家が分かったと錯覚している者もいる。広島に行き原爆ドームを見るだけで平和が、京都の古寺を巡るだけで日本文化の本質が分かるはずがないのである。

筑波山巡検では生徒に「勝手口の眼」を意識させて、村の風景や家の生活を考えさせようとしている。高校生にとっては酷な要求かもしれないが、この視点は村だけではなく、海外でも、むしろ異文化理解では効果的な方法と思う。⁽⁸⁾

4. 地域性にこだわる

地域性にこだわるとは、茨城県とか東京都といった行政的な地域ではなく、かつての生活形態なり生業を一つとするような、いわば生活圏となるような地域圏を母体に歴史を考えることを意味する。例えば、河川を中心に考えるならば流域史が、山を中心に考えるならば行政区域を越えた地域を中心に歴史を考えようということになる。こうした姿勢は、生活者たちの共同性がどういった形で形成され、そこにおける歴史がどのようなものであったのかを考える事が、地方史ないし地域史を考えるうえで大切な視点と思うところによる。

筑波山巡検で山の荘地区を調査対象にしたのは、山の荘が現在の行政区域ではなく、山の荘という地名から荘園名が予想されるように、歴史的なつながりが強い地域であることによる。

歴史的に振り返ると、新治村は平安時代立荘の南野牧(荘)の中にある。南野牧とは、元来兵部省管轄の馬を飼っておく国家の牧場であり、北限は荒張川(現天の川)、南限を筑波川(現桜川)、東限を霞ヶ浦、西限を筑波山に持つ地域であった。この南野牧の北部地域が、国家鎮護の霊場として創建された朝望山東成寺および東成寺を守る鎮守社として勅進された日枝神社の関係により延暦寺領荘園であり、いわゆる山の荘と呼ばれたのである。山の荘の山には、山手と比叡山の両方の意味があるという。山の荘8カ村と言われた小高・沢辺・東城寺・小野・大志戸・本郷・永井、そして現在土浦市に編入された今泉の地域が、通称山の荘と呼ばれたのである。この

名称は明治22年の市町村制による山の荘村に受け継がれている。⁽⁹⁾

社会科教育における地域の範囲は、学習指導要領解説において、①生徒の身近な生活舞台である日常の生活圏（学校所在地を中心とする地域）、②①を含む都道府県の範囲、③①と②を包含する地方（例えば東北、瀬戸内、北陸など）となっている。①はいわゆる身近な地域といわれるものであり、小学校の地域学習でよく取り上げられるものである。地域という概念が学習指導要領で重視されるようになったのは昭和43年の改定からといわれる。地域の概念が形式地域（都道府県など）、均等地域・同質地域（〇〇工業地域・〇〇浜など）、結節地域（首都圏・〇〇盆地など）の3つに分類されて、地域で地域を学ぶ重要性が説かれているという。⁽¹⁰⁾

このような明確な地域概念があるために小学校を中心に地域学習は非常に活発である。生活科の創設でさらに拍車が掛かるものと思われる。⁽¹¹⁾ しかしこうした地域学習の多くが地理的内容が強い点には留意したい。

というのは、筆者をはじめ歴史畑の者は、従来地域の概念にあまり気を使わなかったのは事実であろう。歴史研究における地域の問題は、いわば研究者の課題としてあまり関心が払われていなかった。⁽¹²⁾ 例えば近世史研究では、幕藩体制下の共同体である村を単位として、あるいは藩（正確には国）単位で対象地域を設定する者が多かった。近代史では廃藩置県後の、市町村制下における行政区画としての村を単位として、県もしくは地方単位などに対象地域を設定している。隣接科学の、例えば歴史地理学における空間としての地域や、地理学における厳密な地域設定と比べると、いささかルーズな方法であった。そのためか歴史学習における地域も歴史の叙述が時の政権所在地である中央に偏りがちなこともあって、いわば中央に対する地方の概念でとらえられる事が多かった。

こうした反省も踏まえ、これからの地域調査では行政単位である形式地域を対象にという安易な方法ではなく、土地の人々の生活や生活意識がまとめられるような生活圏を地域として設定することが重要であると考える。⁽¹³⁾

5. 聞き書き調査の視点

筑波山巡検の柱は土地のお年寄り（話者）からの聞き書き調査にある。学校側が直接にお願いした話者たちを対象に生徒が聞き取り調査をするのである。

聞き書き調査といえば日本民俗学の調査方法が頭に浮かぶが、巡検での聞き書き調査は、いくつかの点で民俗学の手法とは異なっている。まず一番重要な話者の選定であるが、正直なところ話者としての資質は気にしない。民俗調査ではそれぞれの分野に適した話者を見つけることが重要な課題だが、巡検では、とにかく高校生の前で話をしてくれるお年寄り、の感が強い。各地区の責任者の個人的ついでで集まった人が多い。だから寺の住職や元教員といった人から、農業や養豚業一筋の人まで、話者の年齢や職業はさまざまである。

次に、民俗学では調査用紙にもとづいて、調査者が得意（専攻）分野とするところを中心に話をうかがうことが多いが、巡検では話者の生いたちが中心であり、とりわけ重視している分野や項目はない。資料1の調査用紙にあるように話者の生いたちから家族構成・系図、職業から村の歴史や産業・栽培カレンダー、氏神や宗派といった信仰まで調査項目自体は数多くあるが、それ

らを全て話してもらい、調査しなくてはならない、というのではない。この調査用紙はいわば生徒のまとめ易さを考慮して作られただけのものである。だから「おじいちゃん、お生まれはいつですか？」から始まるものの、その後の展開は全く予想出来ない。事実、自分自身の生いたちに話が終始する人、養豚業の1年間の流れを話す人、軍隊での経験から平和を説く人など、話者によって内容は様々である。しかし、それらはまぎれもなく話者のライフヒストリーを構成しているものであり、そういった話を聞くことが重要と考えている。

3つ目に異なることは、基本的に毎年話者が同じだということである。民俗調査でも補充調査で同じ話者に会うこともあるが、巡検では調査者である生徒の顔ぶれは毎年異なるが、話者は基本的に同じである。地区の責任者の交代がない限り、大きく変動することはない。例えば、資料1に名前が見える、話者井原織之介(明治37年生まれ)は最初から6回連続話者をつとめた。3年前、高齢を理由に「話者を辞退したい」という申し出があり、現在は話者ではない。井原翁の話は乳牛飼育を中心とした自分自身の生いたちが主体であったが、年によっては軍隊や村会議員、老人会会長の仕事の話や講や食生活の変化などの話が主体になることもあった。

話者とのつながりは巡検当日で終わらず、その後も続くことがある。4年前に何人かの話者を学校に招待した。校内見学や一緒に会食が内容であったが、おりから廊下で出会った生徒たちはなつかしそうに歩み寄って話をしていた。井原翁は過去何年かの生徒の礼状のファイルを持参され、「これが私の宝です」と述べたことは印象的であった。

ところで、こうした変則的な聞き書き調査の狙いを考えてみたい。調査方法としてはいくつかの欠点が見られるが、高校生の聞き書き調査の視点は次の点にあると筆者は考える。

筆者が初めて民俗調査に参加したのは大学2年時、糸魚川の近くの新潟県名立であった。信州出身の筆者にとって村へ入ることは慣れていたが、村の成り立ちや人生儀礼の話は非常に面白かった。なにより話者の生活がそのまま生の資料になり、こういったやり方の学問があることを知った喜びは大きかったのである。村中には書物に書かれていない話や資料がたくさんあることを肌で感じたのである。

こうした喜びを高校生にも体験させたい。日頃都会に生活し、お年寄りと話をしたこともない若者たちに、たとえ1日でも、自分たちの生活にないものに触れさせたいと思う。だが、ほんの一瞬だけの感動では終わらせたくない。村でお年寄りから聞いた古い話を、自分たちの生活空間である都会に戻った時に、再び思い出し、現代の課題としてとらえて欲しいと思う。

山の荘地区では隠居が多い。隠居の話や実際の間取りを調べて生徒は初めて隠居の持つ意味を知る。家長権や主婦権を譲ることの意味を知るのである。この現象に興味を持った女子生徒がいた。祖父母と別居している彼女の一家は、同居をめぐり、2世帯住宅の建築をめぐり、父親の兄弟たちが集まって連日話し合いがもたれており、親との同居という現代的な問題のなかで隠居制度を考えることが出来たと、レポートには書かれてあった。

このような意識・感覚を育てたいのである。都会とか村には関係なく、古い習俗やお年寄りの話が、現在社会にどのような意味を持つのかを、そこから将来に向けて何を学ぶかを、生徒自身に考えさせたい。つまり、地域調査を通して、歴史学や民俗学が現代社会につながる学問であることを認識させたいのである。⁽¹⁴⁾

6. 石造物調査の視点

筑波山巡検 2 日目は石造物調査である。山の荘地区内の石造物、例えば馬頭観音や道祖神、庚申塔や二十三夜塔などの石造物の大きさや形を測り、具体的にスケッチするのである。

調査の対象となる石仏・石碑・石塔などの造形物は、全国各地の路傍に建てられ、講などの信仰集団によって守り伝えられていることが多い。巡検では、こうした石造物に注目するのである。

生徒が興味をもつ石造物は様々である。石造物というと石塔を思い浮かべる者が多く、東城寺境内にある石籠や結界石などは人気が高い。また山の荘地区に多い馬頭観音、石造物の代表格といえる道祖神（本郷にある男女二体形は有名）や庚申塔、日露戦争時の徴発馬の供養塔、太平洋戦争の忠魂碑、小野小町の墓、そしていわゆる墓石など、生徒のレポートにみる石造物は多岐にわたっている。

こうした石造物に注目させる観点には次の 3 つがあると筆者は考える。まず、物から歴史に入り込む視点である。高校日本史授業において、生活に密着した、身近な生活の場から入り込むこと、またそのような教材を提示することが、授業の活性化につながることは以前から指摘されていた。無味乾燥な講義より、ちょっとした「手にとる教材」が授業効果をあげるといふ。⁽¹⁵⁾ この考えに立って石造物という物にこだわることにした。

次に、石造物の存在意義を考えさせたい。村境に建っている道祖神や街道沿いに見える馬頭観音、戦争出征者を記録した忠魂碑や戦勝記念碑などから、石造物などの石碑・石塔が、どのような場所にて建てられたのか、いつ頃建てられたかを調べることによって、今日、目にする村の景観や風景が歴史的に形成されたものであるという意識を生ませたいのである。いわば石造物を媒介にしてその土地に刻まれた歴史を考えさせたいのである。石造物は自然に出来上がった物ではなく、土地の人々の思いや気持ちが生んだ歴史的遺物であることを注目させたいのである。

そして石造物スケッチ（模写）という作業がある。石塔の実測結果を詳しく記入する、造立の年代を年号や干支から判断する、所在地を確認する、刻まれた文字を判読する、形態を正しく模写する。いずれも大変な作業である。とくに石造物の文字判読は、梵字（種子）があるだけに、梵字辞書片手に試みても難しく、結局形態を刻明に模写することが大切になる。日頃の学習では経験出来ないことであり、地域調査では重要な方法であろう。

石造物調査と併行して、地区の概観をつかませるために家配置図を書かせる。家配置図は実際に地区を歩いて、道路や河川、田や畑、寺社や小祠を書き込ませている。家配置図の具体的な書き方は人文調査用紙に掲載しているが、いざ生徒の図を見ると、調査日数の制約はあるとはいえ、非常にお粗末な印象を受ける。「小学校以来の作業」と、生徒は弁解するが、地区や村の景観を瞬時に判断する能力が弱いことには驚かされる。高校生になっても子どもの視野でしか描くことが出来ないのである。⁽¹⁶⁾

7. 地名の重要性

当初、筑波山巡検において地名および地名教育の重要性については、あまり考えられていなかった。ところが昭和63年、事前学習の一環として開かれた講演会で講師として出席した谷川彰英は講演の中で「この地域はとても夢やロマンがある。まず東城寺から流れている川が天の川、そ

して小野という地区には小町という地名がある。恐らく小野の中に小町という地名があるのは、日本ではここだけではないだろうか。そして、何よりもびっくりしたのは、この小野には小町ばあさんがいることである。」と生徒に語り、地名の重要性を力説した。(17)

かねてから地名教育の重要性を説いてきた谷川にとっては当然の発言だが(18)、生徒にとっては驚きであったようだ。(19)

考えてみると、従来から地名そのものを研究対象とすることは地理学や民俗学では数多くあったが、歴史学では意外と少なかったように思える。郷土史研究の中で地名が重んじられたことはあっても、日本史研究では趣味的なものと考えられていた。

ここで生徒の地名調査が始まった。小野にある小町伝承を調べあげた。小野という地名には小野小町に関する伝承が多い。平安時代の女流歌人小野小町は美人の誉れ高い女性として、各地に小町の遺跡が説かれ、出生地や墓さえ、全国に数多くあるという。新治村小野地区に残る伝承では、小町は京より陸奥に旅する途中、坂東二十六番の札所として有名な清滝観音に詣でた際、病に倒れ、小野源兵衛宅で親切な介抱を受けたが、ついに亡くなったという。源兵衛によって建立された五輪塔が小野小町の墓として、今日に伝えられているという。また小野宅には小町像が保存されており、かつては年に1回公開されたともいう。

この小町伝承の他に、東城寺が歴史的には東成寺と記されていたことに注目した生徒もいた。東成寺がいつから東城寺を書かれるようになったのかを調べた結果、江戸時代以降だと分かった。江戸時代、この地域をおさめた土浦土屋氏の土の字を加えることによって東成寺は東城寺と書かれるようになったという。

また本郷に残る館という地名は、かつてこの地に館があったところから命名されたという。本郷は山の荘地区の中心地であり、かつて常陸北条から国府石岡に通じる街道の中間に位置した重要な交通要所であったため、堀を巡らし館を築いて統治に当たったという。

一つの地名から地域に関する知識が膨らんでいくことがわかる。ここに地名学習の教育的効果がある。谷川の講演以降、調査用紙には地名の調査項目が加えられた。

近年、地名から地域の歴史を見直そうという学習が盛んである。地名の歴史的背景のみならず地名の消滅や改変といった現代的問題からアプローチするものもある。教材として地名の持つ意味は大きいだけに、今後も山の荘地区での地名開発に努めたいと思う。

8. おわりに

この筑波山巡検がどのような意味を持つかを、ここで論じる余裕はない。生徒たちが何を感じたか、『人文調査報告要旨集 1990年』から、2つだけ紹介しよう。

「私達が調査したことはほんの少力で、山の荘地区の地域性はどんなものかと聞かれたとしても答えることは難しいが、私達が今住んでいるところでは、もう見る事が出来なくなってしまっている小さなことが、まだここには残されていると思う。例えばお祭の話やおばあさんの話。

しかし、ここでも少しずつ、けれど確実に新しい文化の波が押し寄せている。それが、農業の敬遠であり、跡取りの問題である。」(B組1班)

「今回の巡検では机の上の勉強から自分の手や足、知識を使ってする勉強ということで、自分

たちの自覚やけじめを必要とする行事だった。同じ茨城に住んでいながら、今まで知らなかったつくばの面々、昔から伝わる行事や伝統を多く知ることが出来た。」（C組3班）

こうした感想は実際に地域を歩き、自分自身の目や足で地域をとらえ、そして地域の人々と話をした中で、自然に生まれてきたものであろう。聞き書き調査のお年寄りには、生徒全員が礼状を書いた。儀礼的なお礼より、聞き書き調査で得た事を記した礼状が多かった。

「私の母の実家は同じ茨城県友部町で農家なので、仏壇や氏神様や間取りなどの説明は手にとるように分かりました。そして仏壇は人にあまり見られない居間にあり、神棚は人に良く見え客間にあるとお聞きした時は、祖父の家の中を頭の中で思い出して、今まで考えもしなかったのですが、なるほどなと思いました。」（女子生徒）

「そして何よりも最大の収穫は、椎茸の栽培を目の当たりにしたことです。ほとんどの野菜をスーパーで苦もせずに行っている僕たちの世代にとっては、福田さんの家でやっている椎茸栽培は、物を作る人達の苦労というもの再確認した思いです。」（男子生徒）

思うに、高校生による地域調査の最大メリットは、地域の問題を過去のものとして考えるのではなく、現在の自分自身の課題としてとらえることにあり、筆者は考える。その場合の切り口として「勝手口の眼」と「地域性にこだわる」の2点を大切にしたい。この2点こそ、地域調査の重要な視点であろう。

高校社会科再編成の中で、高等学校における「社会科」教育は新たな道が模索されている。それは本学会のような社会科教育学における研究課題の模索でもある。「社会科」として人格形成の立場から教材、教科内容、教授方法の充実を計ることが大切である。その意味で本稿が、なにかしらの参考になれば幸いである。

資料1（聞き書き調査用紙）と資料2（石造物調査用紙）

註）

- (1) 生活科に関する論考は多いが、気軽に読めるものとしては、谷川彰英著『生活科で授業が変わる』（明治図書教育新書122 1991年）がある。
- (2) 篠原昭雄「社会科教育の本質に関する研究課題」（筑波大学社会科教育学会編『筑波社会科研究』 第10号 1991年）P 1～10
- (3) 『茗溪学園の教育 — 七年のあゆみ — 』（1986年）参照のこと。
- (4) 最近の講師は
1989年 筑波大学助教授谷川彰英氏 「筑波山巡検の視点」
1990年 筑波大学教授大濱徹也氏 「土地の祈り、民のこころ」。
- (5) 茗溪学園社会科編『筑波山巡検人文分野報告要旨集』（1990年12月）等を参照のこと。
- (6) 大濱徹也「我孫子近現代史の課題」（『我孫子の歴史を学ぶ人のために（二）』我孫子市教育委員会 1983年）P 169～177
- (7) 例えば初代社会科教科主任であった吉田潤氏は各地区を何回も訪れ、親交を深めた。初めて山の荘地区を案内してもらった筆者は、氏が各家の屋号から人間関係まで熟知していたこ

とに驚きを覚えたものである。

- (8) 近代日本の植民政策論に画期的な業績を残した経済学者矢内原忠雄（新制東京大学第2代総長）は台湾調査の思い出を次の様に語っている。
- 「植民地に行ってみることに、普通よくいわれますが、表玄関から入っていくと、見せる所も、話してくれることも、会う人もきまっています。そこで私は、昭和2年に台湾に行ったのですが、行く時に、台湾総督府へいきなりいかなかったし、拓務省の紹介ももらわなかった。台湾人の知り合いがありまして、それで行ったのです。」（『私の歩んで来た道』）
- (9) 新治村村史編纂委員会編『図説新治村史』（新治村 1986年）参照のこと。
- (10) 谷川彰英「地域学習の方法と課題」（佐藤照雄編『社会科教育』 建帛社 1987年）P95～107
- (11) 例えば谷川彰英編『地域学習の授業づくり』（東京書籍 1991年）など。
- (12) 例えば大塚史学会編『新版郷土史辞典』（朝倉書店 1969年）には「地域」という用語はない。大塚民俗学会編『日本民俗辞典』（弘文堂 1972年）には「地域社会」「地域性」の用語が見える（P 441）。
- (13) かつて筆者は行政区域と異なる地域住民の生活空間をフィールドとして生活史叙述を試みたことがある。詳しくは拙著『三浜漁民生活誌 — 大洗地方の近代史 —』（崙書房ふるさと文庫 148 1990年）参照のこと。
- (14) 民俗学者宮田登（筑波大学教授）の最新著作『怖さはどこからくるのか』（筑摩書房 1991年）には、若者と民俗学の関係が平易に述べられている。
- (15) 高校日本史教育における「手にとる教材」論は宮内正勝・阿部泉著『手にとる日本史教材 入手と活用』（地歴社 1988年）が圧巻である。
- (16) 子どもが描く地図に関しては寺本潔著『子ども世界の地図 — 秘密基地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間 —』（黎明書房 1988年）が参考になる。
- (17) 録音「筑波山巡検人文講演会講演録 谷川彰英 1989年版」。
- (18) 谷川の地名教育に関する論考は多いが『地名を生かす社会科の授業』（黎明書房 1986年）が分かり易い。
- (19) 生徒の感想文から
- 「今まで地名なんて正直言ってあまり興味がなかった。今日先生が新治村の治（ハル）の字は今治と同じように新しく開墾した開いた土地だと話したところから、地名が面白くなった。途中で馬片のつく漢字（駅・駄賃・駒）の話や小野小町を紹介した時、是非小野へ行って小町ばあさんを探そうと思った。」（女子）。
- この講演会以後、人文調査用紙項目に「地名」が加わった。

(1991年9月30日脱稿)